

遺骨と暮らす

遺骨の物質性から見る遺骨を家庭内に安置する行為と手元供養

Living with Cremated Remains : The Materiality of Remains in Domestic Enshrinement and *Temotokuyō*

宮澤安紀

MIYAZAWA Aki

- ① はじめに
- ② 遺骨を物質性の観点から捉える
- ③ 遺骨と暮らす
- ④ 遺骨の物質性と「手元供養」
- ⑤ 結論に代えて

【論文要旨】

近年までの日本において、遺骨は必ずしも家庭内で祀られる一般的な対象ではなく、長らく墓所に納めるのが当たり前とされてきた。しかし2000年代以降、遺骨を加工したり、専用の容器に保管し身近な場所に留めておく「手元供養」の登場により、遺骨を身近なところに置く現象に注目が集まるようになった。しかしこれまでの研究では、供養実践の変化という観点から生者の側に焦点が当てられ、また遺骨に関してもその背後にある霊魂観や他界観の衰退などが取り上げられ、遺骨そのものについてはあまり論じられてこなかった。そこで本稿では、遺骨の物質性に着目することで、遺骨そのものと生者がどのような関係性を結んでいるのかを考察した。まず手元供養品を使っているかいないかにかかわらず、長い期間納骨をせず遺骨を自宅に安置している人々の事例を分析し、そうした行為が単に経済的な困難等から行われるのではなく、故人（遺骨）との別れのタイミングを自分たちで決定しようとする試みの結果でもあることを示した。また遺骨は受動的な「モノ」ではなく、生者の生活やアイデンティティをともに作り上げる事例も存在することを示した。そうした考察を踏まえ、なぜ遺骨は生者にとって身近な場所に留めておきやすいのかを、遺骨の物質性の観点から分析した。そのうえで、手元供養品を扱う業者への聞き取りも踏まえながら、「手元供養」の商品やサービスを、遺骨の物質的な側面をコントロールすることで、遺骨を日常空間や第三者の視線が交わるパブリックな場においてもとどめやすくする試みとして論じた。

【キーワード】 遺骨, 手元供養, 物質性, 納骨, 生者と死者の関係性